

令和三年荒魂之會八月例會資料

日時・八月二十一日（土）午後一時から午後三時迄
会場 秋葉原驛前茶房
祭禮 東京・曹源寺かつば祭
出来事 生麦事件（文久二年）
人物生誕 小野蘭山 人物忌日 山縣大弐

| 七月の回顧（五名） | | | | |
|-----------|-------|----|------|-------|
| 佐藤 通次氏 | 平成 二年 | 七月 | 三日 | 三十二回忌 |
| 岩崎 孝生氏 | 平成 六年 | 七月 | 七日 | 二十八回忌 |
| 高橋 義孝氏 | 平成 七年 | 七月 | 二十一日 | 二十七回忌 |
| 江藤 淳氏 | 平成十一年 | 七月 | 二十一日 | 二十三回忌 |
| 鈴木 克則氏 | 平成十八年 | 七月 | 二十四日 | 十六回忌 |

内容

研究会 午後一時から午後三時迄

- （一）『椿説・弓張月』瀧澤馬琴著 報告者 竹内
- （二）萬葉集輪讀
- （三）日本書紀輪讀
- （四）偉人暦

九月十九日（日）午後一時から午後三時迄

研究課題 『日本永代藏』井原西鶴著 報告者 前川

椿説・弓張月

江戸時代の讀本。曲亭馬琴作、葛飾北齋挿絵。二十八卷二十九冊。

「椿説」は「珍説」の意。前編は文化四年（一八〇七）、後編、続編は文化五年（一八〇八）、拾遺は文化七年（一八一〇）年、残編は文化八年（一八一二）に江戸の平林庄五郎から刊行。

【あらすぢ】

少納言入道信西との不和で九州へやられた源爲朝は、八町礫紀平治を家來にし、白縫姫を妻として九州を平定したが、保元の亂に敗れて伊豆大島に流される。それでも爲朝は善政を敷いたが、官軍に攻め寄せられ、鬼夜叉を身代り死にさせて、九州を経て琉球に漂着した。琉球では、尚寧王の暗愚に乗じて妖術使ひ矇雲が實權を奪ひ、奸臣利勇と對決してゐたが、爲朝は世繼ぎの王女を助けて、孤島に漂着してゐたわが子舜天丸や紀平治とともに濛雲を破り、琉球を平定した。舜天丸は王位につくが、為朝は昇天する。

構想は雄大であり、信西、矇雲の二大敵役を爲朝に配して、善惡が抗争する波瀾萬丈の筋立を造りあげ、爲朝の白縫や寧王女とのロマンスも備はり、文章は美麗な和漢混淆文で、『南總里見八犬傳』と並ぶ馬琴の代表作である。

【参考圖書】

『弓張月』前篇の序に、「唐山の演義小説に倣ひ、多くは憑空結構の筆に成る」と記されてゐるが、馬琴はこの作を書くに當り、もっぱら『水滸後傳』に趣向を求めた。『水滸後傳』は、『水滸傳』の豪傑李俊が暹羅に渡り、國亂を平定して、位に即く顛末を述べたものである。（馬琴四十歳のころ）

餘嘗羅氏が三國志、及び十二朝、武王、漢楚、隋史遺文、玄宗、五代史、岳飛、元明、國姓爺の諸演義を閲するに、變化の奇、死轉の妙、虚實相半せり。

十月（詳細未定）

研究課題 『飛驒匠物語』石川雅望著

十一月（詳細未定）

研究課題 『近江縣物語』

十二月（詳細未定）

研究討論『研究課題の纏めと討論と』令和四年の研究課題について

三、催物案内

- ・三の丸尚藏館 第八十八回展覽會 「近代陶磁をふりかへるー明治・大正・昭和初期」六月八日（火）～九月五日（日）
- ・国立博物館 特別展 聖德太子千四百年遠忌記念「聖德太子と法隆寺」七月十三日（火）～九月五日（日）
- ・六本木東京ミッドタウンホール 生誕二百六十年記念企画特別展「北齋づくし」 七月二十二日（木）～九月十七日（金）

前篇卷之三 第八回（二四七頁）【保元の亂の敗走場面】

八町礫紀平治は、いまだ薄疵一箇所も負ず、主とともに踏とどまりて防ぎ戦ふを、爲朝見かへりて、「今は君も父も遙に落伸給ひつらんに、いつまでかくてあるべき。いで御蹟を慕ひまあらせん」とて、心しづかに落ゆき給ふを、逐ひとどめんとする敵あらざれば、既に行延給ひしが、又馬を馳かへして、上矢の鏑只一條のこれをを、世の人に現せばやとおぼしけん、寶莊嚴院の門の柱に、彈と射とめて過給ふ。抑爲朝この軍に、二十四差たる矢二腰、十八差たる矢三腰、十六差したる矢三腰を負給ひしに、このうち義朝の兜の星を射たると、大場景能が膝節を射切つたると、二條ならでは化矢なく、或は一條に二騎三騎射つらぬき、或は近づく敵をば引よせて首をねち切、搔攪て投ころし給ひぬれど大廈の將に壞れんとするとき、よく一木のささゆべきにあらざれば、心の外に敗北し、終に落人となり給ふこそぜひもなき。

第九回（一五四頁）【白縫の女傑ぶり】

白縫涙さしぐみて、「わらは女子の身にしあれど、父の子にして爲朝の妻たり。今夫の生死をしらず。父又討死し給ふを見て、いかで落ゆき侍るべき。殊さら幼きより母御に後れまゐらせ、父の慈愛に人となれば、させる孝行は竭さずとも、せめて死出の郷導して、三途の川の筏とも、埋艸ともなり侍りてん。かく思ふ身をわりなくも、落ちよ活よと仰するは、味氣なき世に存命て、憂を見よとやおぼすらん。父の仰はそむかじと、辨ながらの是のみは、うけ引がたく侍る」といふ。

第十七回（二五六頁）【女護島の人心】

今この女子の説ところと、世に語り傳へたると、當らざれども遠からず。人はさまざまの世を経るものかな。都會繁花の地に生れたる人は、耕さずして食ひ、織ずして被、却田舎人の辛苦を思はず。かかる果報のありながら、なほ驕に耽りて足らざるをうらみ、しうねく貪りて、飽ことをしらねば、終には冥加に盡はてて、子孫跡無く

なりゆくもの多し。われ伊豆の嶋々を歴覽せしに、もののあはれなる、比ふべくもあらずと思ひしに、又かかる嶋さへあり。

第二十一回（三〇一頁）【朝稚を紙鳶にて下田へと飛ばす段】

かくて爲朝は、紙鳶の索のはしを、赤松の幹に繋ぎとめ、刀をすらりと抜給へば、「喃淺まし」とて鰯江が、袂に携るをふり拂へば、又鬼夜叉が楯となる。心も索も張つてよき、主君の刃の下にたつ、命をしまぬ忠臣傍妻、「妨せそ」と搔退て、またふりあぐる刀尖にまはる爲頼嶋君も、綱手に狂ふ意馬心猿、裳にまつはる親子主從煩惱の絆を斷らん。斷らせしとて、その争ひや君子の徳に、譬し風もますら男の、誓言は違じと、おもへばいよ爲朝は、志を勵して、今ぞわが子の生死の際、源家累代氏の神、正八幡の擁護をもつて、朝稚を恙なく、下田の浦に落さし給へ、・・・

第二十五回（三四八頁）【崇徳院の墓前】

「君十善萬乗の聖主として、錦帳を北闕の月に輝かし給ひしも、今は懷土望郷の魂、玉體を南海の俗に混ず。・・・」

こは怪しと見るほどに、やがて御輿を、墳のほとりに扛居しかば、武士は二帯に列を整て蹲踞し、警蹕の聲とともに、御輿の中より玉音高く、

朝倉を只いたづらにかへすにも釣する海士の音こそ泣るれ

と一首の歌を口號、やをらおりたちて、設のしとねに着給ふを見奉れば、新院此世に在しける日の、面影に露違はせ給はず。思ひしよりは寔給へり。

（三五五頁）【源氏没落の道理】

されば平家讃岐の浦浦に没落して、滅亡たるも、全く彼御崇なり、とふるくよりいへり。今按ずるに、平治元年正月二日、左馬頭義朝朝臣、長田が爲に殺さる。正治元年正月十三日、右大將頼朝卿薨ず去年建久九年十二月、落馬によつて病をなせり。承久元年正月右

大臣實朝公、禪師公曉に殺さる。父子三代みな正月に于て薨ず。しかも終焉、おのおの改元の年にあり。又是希といひつべし。

馬琴の家族

家族の状況は、必ずしも好調ではなかった。妻のお百はすが目で容貌も醜く、無學で愚癡っぽい女であつた。馬琴は生涯この女のために悩まされた。倅の宗伯は、苦心して醫者に仕立あげたものの、多病で人の脈をとるどころではなく、始終癪をおこして、母や妻のお路と衝突してゐた。かうして、瀧澤家にはいはゆる「内亂」がおこり、そのたびに馬琴を苦しめたのである。自分の生存中はどうにかなるとしても、一家の前途は暗澹たるものがある。年は老い、眼は衰へても、晏如としてゐるわけにはいかない。さういふ焦慮が馬琴の心をふるひたたせ、超人的な業績をなしとげさせたのである。（麻生磯次著『瀧澤馬琴』吉川弘文館刊）

馬琴の人物

馬琴は自尊心が高く、人の缺點がすぐ目につくといふ風で、なかなか人とは妥協のできる性格ではなかった。倅の宗伯は病身で人交らひを好まず、妻のお百は癪もちで、お天氣屋であつたらしい。そんなことから、近隣との交際も少かつた。馬琴はそれをよい事として、超然とかまへ、著作に没頭してゐたのである。（同右）